明日への道標

違いを認め受け入れる
―新渡戸稲造の武士道―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

武士道は流暢な英語で綴られた一冊の書物によって海外に伝えられた。日露戦争勃発前夜、アメリカ大統領セオドア・ルーズベルトも愛読したという。やがてドイツ語やフランス語などに翻訳され、世界的なベストセラーとなる。

著者の新渡戸稲造（にとべいなぞう）（1862―1933）は旧五千円札の肖像に採用されて広く知られるようになった。教育者として活躍し、国際連盟事務次長も務めるなど日本初の国際人といわれている。

当時の西欧列強諸国にとって日本はアジアの未開の国に過ぎなかった。武士の子として生まれ育った新渡戸は武士道の解説を通じて世界共通の普遍的な倫理・道徳・文化を探求しようとした。だが日中戦争に突入する軍部の暴走や偏狭な排外主義の煽動によって窮地に追い込まれる。

カリフォルニアの療養生活で

新渡戸は現在の岩手県盛岡市で南部藩の勘定奉行の三男として生まれた。倒幕派が台頭する幕末の動乱期に藩校の作人館に通う傍ら新渡戸家の掛かりつけの医者から英語を習う。

明治維新を迎えて10歳で上京し、新たに創設された東京英語学校、のちの旧制第一高等学校に入学する。藩領だった青森県十和田市で灌漑用水路を整備し、新田開発などの事業に情熱を注いだ祖父や父の遺志を受け継いで農学の道を志す。

北海道開発の教育拠点として設立された札幌農学校（北海道大学）に二期生として進学する。一期生を担当し、「少年よ、大志を抱け」の格言で有名なウィリアム・クラークはすでにアメリカに帰国していたものの、彼の影響で一期生の大半はキリスト教徒になっていた。新渡戸もまた人道的な教育方針に共感し、のちに無教会主義を提唱する同期の内村鑑三らと洗礼を受ける。

新渡戸稲造

卒業後、学友たちと共に北海道庁に採用され、畑の作物に被害を及ぼすイナゴの異常発生対策に精を出す。さらに向学心に燃えて創立されたばかりの東京帝国大学に転入した。面接に際して「太平洋の架け橋になりたい」と語った新渡戸はまもなく渡米し、ジョンズ・ホプキンス大学の私費留学生となった。この頃、のちに妻となるメアリー・エルキントンと出会う。

留学中、札幌農学校助教授に任命され、官費でドイツへ渡り、ボン大学やハレ大学で農業経済学などを学ぶ。帰国後、札幌農学校教授に就任したものの、メアリーと共に体調を崩し、アメリカ西海岸カリフォルニア州のモントレーに移り住む。療養生活中に『武士道』（BUSHIDO　The Soul of Japan）を英文で書き上げた。フィラデルフィアの出版社から1899年に初版が刊行される。

日本語訳は日露戦争後の1908年に出版された。

内村鑑三の『代表的日本人』、岡倉天心の『茶の本』と並び、明治期に卓越した英語で上梓された歴史的名著として現在も読み継がれている。

デモクラシーは平民道

武士道をはじめて体系的に論じた『武士道』は「道徳の体系としての武士道」から始まっている。新渡戸は武士道を戦士が仕事や日常生活において守るべき掟であり、高貴な身分に伴う義務と定義した。第2章以降では正義、勇気、仁義、礼儀、誠実、名誉、忠義、克己などの徳目について説明。ただ「武士道は知識を重んじるものではない。重んずるものは行動である」と釘をさしている。

第12章「自害と仇討ち」では武士の勇気を讃える一方で「いたずらに死を選ぶことは卑怯であり、真の名誉は天命を成就すること」と主張した。第14章「女性の訓練と地位」では封建制による身分・女性差別を批判。近代日本の女子高等教育を積極的に推進する観点から新渡戸は東京女子大学の初代学長、津田梅子が創設した津田塾（津田塾大学）の顧問などを務めている。

異文化交流の先駆的な著作となった『武士道』を苦々しく思い、非難する声も少なくなかった。国粋主義者たちは「史実を無視したキリスト教徒の自分勝手な思想」「誤った日本像を海外に広めて混乱させている」と烈しく糾弾した。

体調が回復した新渡戸は台湾総督府民政長官となった同郷の後藤新平に請われて技師となり、現地でサトウキビ栽培の指導に汗をかく。帰国後、第一高等学校校長などを歴任した。

国際連盟が1920年に発足すると『武士道』で世界的に高名な新渡戸が事務次長に抜擢される。就任して国際連盟を「平和のための砦の前哨基地」と位置づけ、異文化諸国の相互理解や人種差別の撤廃などに奔走した。同時期の論稿「平民道」ではデモクラシー＝民主主義を平民道と訳すように提唱。「階級的区別なき一般民衆の守るべき道こそ国の道徳でなくてはなるまい」「武に重きを置かんとするよりは、平和を理想とし、かつ平和を常態とするのが至当であろう」「民を根拠とし標準とし、これに重きを置いて政治も道徳も行う時代が今日まさに到来した」「今後は武士道より平民道を主張することこそ時を得たものと思う」と武士道から平民道への抜本的な転換を促している。

しかし国際情勢は平民道と乖離した戦争への道に舵を切っていた。新渡戸は7年間にわたって務めた事務次長を深い憂慮のうちに退任する。

国際社会に尊敬される道

軍部は中国へ侵攻し、傀儡政権による満州国を樹立するなど国際社会からの孤立を深めていた。新渡戸は「他国の領土を掠（かす）め取り、他人を讒謗（ざんぼう）して自分のみが優等なるものとするは憂国でもなければ愛国でもない」「我が国民性にいかなる欠点があるかを省みるのが国を偉大にする一の方法ではないか」「慢心は亡国の最大原因である」と反対の論陣を張ったものの、逆に非国民と罵声を浴びた。反日感情をやわらげるために渡米し、日本の困難な情況を伝えようとしてもアメリカの世論は反応せず失意の日々を送る。そして1933年、日本は国際連盟からの脱退を正式に表明した。

それでも新渡戸は絶望しなかった。同年カナダのバンフで開かれた太平洋問題調査会会議に出席し、あらためて相互理解による国際平和を訴えた。会議終了後、国際港が設けられていたビクトリアで倒れ、出血性膵臓炎によって帰らぬ人となる。71年の起伏に充ちた一生だった。

生涯にわたって異文化世界の和解・融合・共生をめざそうとした新渡戸は「人間は、それぞれ考え方や、ものの見方が違うのが当然である。その違いを認め合い、受け入れられる広い心を持つことが大切である」と賢明な寛容性を唱えている。『武士道』を英語で書いたのも日本に対する西欧文明社会の誤解、偏見、先入観を払拭することを目的としていた。そこからさらに国際社会で尊敬される道を模索し、武力ではなく相互貢献が人類共通の課題であることに到達する。「国がその地位を高めるものは人類一般すなわち世界文明のために何を貢献するかという所に帰着する」と。

国家が対立を深める現代社会で新渡戸の視線はいまなお有効だ。「人間の無限の魂を、国家の限られた枠組みの中に閉じ込めることはできない」と人間の自由な魂が互いに国境を超えていくことを希求している。